



## ベーツ先生に寄せて

井口 禎三 (経済昭 39)

1998年8月20日発行の『関西学院大学英語研究部(ESS)100年史』104頁に、「ESS創立65周年英文記念誌発刊」と題して次の文章がある(英語研究部の起源は1896年の英語会設立に遡る)。

六カ月に亘る未知の世界での格闘だった。編集委員会メンバー(編集長:上出厚郎〔故人〕)は言うに及ばず諸先生方、先輩諸氏、部員各位の御協力と御尽力の賜物であった。第三代院長 Dr. Bates の御言葉を巻頭に飾る100頁を越える労作である。〔「第三代」となっているが、これは今更ながらではあるが間違いで、訂正し、お詫びをしておきたい。〕

今回、この「創立65周年英文記念誌」*Past and Present 1896-1962* 発刊にあたってベーツ先生からお言葉を頂戴した経緯について書く機会を与えて下さったことを先ず感謝したい。



1954年、私は関西学院中学部に入学した。以来、矢内正一部長の薫陶に始まり、河辺満穂部長と加藤秀次郎部長【右】の下で高等部時代を過ごし、その後加藤先生には大学経済学部で新渡戸稲造の『武士道』を読みながら英訳するというユニークな英作文の授業をして頂いたという懐かしい記憶がある。次第に学生数が増加する状況に鑑みて、本来の英語教育が教室だけでは難しくなりつつある中、ESSの役割は大変重要であり、その点よく頑張ってくれているとの力強い励ましを加藤先生から頂いたこともあった。更には、ランバスチャペルでの挙式に際し、学生時代以来大変お世話になっていたブレイ先生【左】に司式を、加藤先生に媒酌をお願いし、両先生とも快く引き受けて下さったことは、今も忘れられない思い出になっている。

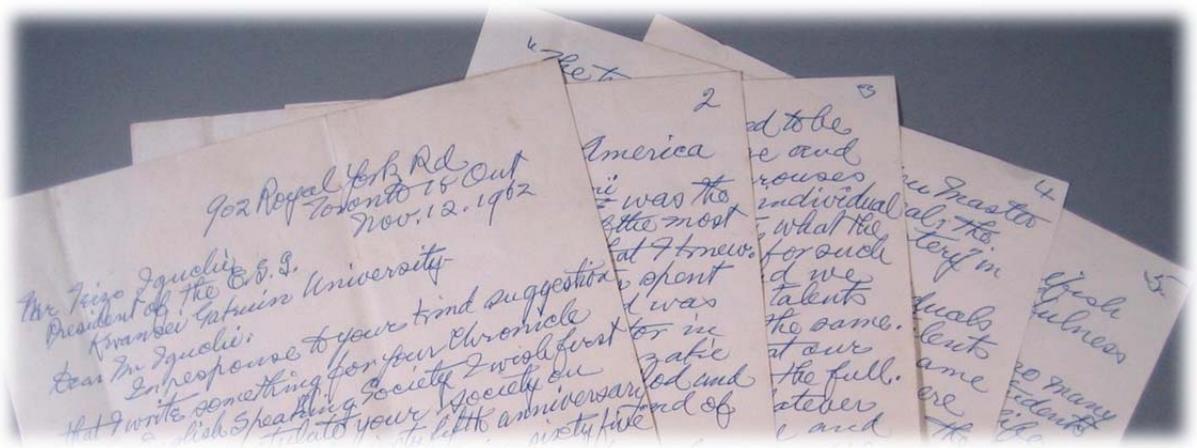


中学部を卒業し高等部へ進む際、折角関西学院に学ぶのだから、関西学院らしい学業知識を身に付けたいと私は望み、両親も喜んでくれたので、高等部のESSに入部した。先生方、先輩方、同輩、後輩の薫陶を受けながら、連日授業後の数時間を英語の書き取りに始まり、音読、解釈、会話練習に明け暮れる毎日を過ごすことになった。そして、経済学部に進学すると同時に、大学のESSに当然の如く入部した。あまり熱心な部員ではなかったかも知れないが、それでも1962年度の役員、所謂コミティーのメンバーとなった我々は、同年1月から準備活動を開始した。先代部長からの引継ぎ事項のなかに「ESSの65周年記念誌を発刊したかったが手が回らなかった。なんとか実現できないか」という要望が含まれていた。それが、冒頭述べた一節に繋がるのだが、実務的には準備作業に随分と時間が掛かり、正直6ヶ月どころではなかった。



ESS諸活動とは別に、この記念誌の編集作業、原稿集め、広告集め等に直接従事する学生部員は勿論、原稿の英語チェック等に貴重な時間を割いて下さった先生方、また慣れない作業を叱咤激励しながらも暖かく見守って下さった卒業生先輩諸氏、通常の新新聞広告に加え、追加広告に快くご協力下さった広告主の皆様方、本当に多くの方々の方がこの65周年記念誌のために結集した。

これらの作業は「クロニクル(chronicle)」と呼び慣わしていた。内容、体裁が決まってくるにつれ、巻頭を飾る言葉をどなたに書いて頂くか、考えを巡らせ続けた。私自身はESSの「部長」という職務もさることながら、10月28日に公演が迫るKELU(Kansai English Language Union)の第一回英語ドラマフェスティバルを控え、演目決定が少し遅れていただけにイオネスコのドラマ「犀」の練習に夏休みも忘れるほど没頭していた。この公演後一ヶ月も経たずして実施された第11回高松宮杯全国大学英語弁論大会の予選を何とか通過し、12月9日の宮城県仙台市に於ける本選に向けての準備練習と、ESS漬けの毎日を送っていた。その緊迫した毎日の中で、クロニクルの「巻頭言」という3文字がグルグルと頭の中で回るものの、落ち着く先のない状態であった。ところで、私の高等部と大学のESS生活に於いて一方ならずお世話になったのは、大学教授のDr. Lloyd B. Graham先生ご一家であった。馴れ初めは高等部2年生の頃、大学生の先輩に連れられて、キャンパスの中の4号館であったと覚えているが、教授のお宅にお邪魔した時であった。専ら奥様が私の下手な英語のスピーチをコーチして下さいました。何とか聴衆に聴いて貰えるよう仕上げるためであった。しかし、教授は大層お忙しい方で、お邪魔した折にご挨拶できればよいのだが、当初は滅多にお姿を見かけることすらできなかった。勿論、私がお邪魔する時間と教授ご在宅の時間が重ならないということもその大きな理由ではあったのだが。それでも、優しくも厳しくご指導くださる奥様(私たちはミセス・グレアムとお呼びしていた)のご期待に何とか応えねばと、必死に努力を重ねていた。



グレアム教授は 1922 年にカナダのカルガリーでお生まれになり、飛び級で 2 学年も進級するという秀才だった。幼少のころ手にした英語と中国語で書かれた本がきっかけで、漢字という表意文字に大変興味を抱いたと伺ったことがある。大学卒業後、沿岸警備の仕事に従事する中、カナダ政府の日本語クラスに編入され、終戦前の約 2 年間、日本語教育を受けられた。ヴァンクーバーでの日本語学習中、翻訳者になることを強く希望され、終戦直後、日本で GHQ の通訳・翻訳官として働き、更に LARA(公認アジア救済機関)のトラック運転手(ボランティア)の仕事を引き受けられた。その後、いったん帰国して社会福祉を学び、修士コース修了後の 1951 年、再来日を果たした。International Social Service (ISS) 東京支部の創設に奔走し、戦後日本の社会福祉制度の確立に尽力された。1956 年に帰国され、1958 年、トロント大学で博士課程(PhD)を修了し、1959 年、ついに 関西学院大学文学部教授として、ご家族を連れての来日が実現した。

私が高等部に在学していたのが 1957 年 4 月から 1960 年 2 月までだから、それこそグレアム先生は社会学部設立の準備と日常のお仕事为重なり、一介の学生である私などが想像もできないほど多忙を極めていたに違いないと今になって想像するのが関の山である。それでも、大学入学直後から、週一回の割で奥様を中心にした学生仲間による英語ディスカッションの集まりに加わり、定期的にお宅を訪問するようになった。ある時、奥の部屋から、電話で日本語を話す男性の大声が聞こえて来たので、「誰か奥の部屋に来ているのですか」とお尋ねしたところ、「いいえ、あれは主人ですの」と奥様が答えられたのには驚いた。それほど、その日本語は自然に聞こえたということだった。学年が進み、理解力が幾らかでも増した私たちに、グレアム先生が日本に於ける「山間牧畜」の重要性を熱く語られたことを今でも思い出す。その後、千刈に実験牧場が開かれ、何度か仲間と一緒に勤労奉仕に連れて行って下さったことがあった。終わってから、先生は笑いながら、嬉しそうにおっしゃった。最初、「遊び半分の学生グループに来てもらっても何もできないでしょう」と否定的だった牧場の現場責任者(日本人の先生)が、数日に亘る勤労奉仕後は「本当に助かりました」と言っておられたと。

英語で「自己紹介」したり、初対面の人との会話の切り口を求めたりするとき、「趣味」を話題に取り上げることが多い。ある時、私はグレアム先生に決まり通りに「先生のご趣味は何ですか」と伺った。しばらくお考えになった先生は、「そうですねえ、私の趣味は仕事ですかねえ」と仰った。このことは先生のお人柄と重なり、私の脳裏に強く残った。後年、就職に際しての提出書類に「尊敬する人物」として、理念的にはアルベルト・シュバイツァの名を挙げ、現実生活の中ではグレアム先生の名を挙げたことを今でも覚えている。グレアム先生ご一家とのこのような思い出は数えれば切りがない。私が会社生活を辞めてからも、自宅にお招きすることが度々あり、また先生のお仕事のお手伝いをさせて頂いたことも記憶に嬉しく、懐かしく残っている。ご高齢になり、カナダでお過ごしになっていたが、残念ながら、奥様は 2013 年暮に先立たれ、先生も 2017 年 4 月 19 日、天に召された。



さて、クロニクルの「巻頭言」に戻るが、困った挙句、私が相談を持ち掛けるのは矢張りグレアム先生をおいてはなかった。「先生、これまで ESS 顧問をお願いしてきた先生方のどなたかをお願いするのがよいでしょうか。あるいは、学院の関係者、例えば院長を経験なさった方などをお願いするのがよいのでしょうか」と切り出した。「私で良かったら…」という助け舟を内心期待していたところ、暫く黙って考えられた後、「井口さん、あなた急いでベーツ先生にお手紙を書きなさい」と仰った。我が耳を疑い、「失礼ですが、もう一度仰ってください」と聞き返さざるを得なかった。先生はもう一度ゆっくりと言われた。「ベーツ先生にお手紙を書いてお願いしなさい。かならず応えてくださる筈ですよ」。

第 4 代ベーツ院長は 1910 年にカナダ・メソジスト教会の代表の一人として来学され、1920 年 10 月 15 日から 1940 年 9 月 11 日まで、約 20 年間に亘り、院長の職に就かれていたとの記録がある。日本が太平洋戦争に突入する直前までの激動の時期にその職責を全うされたということは、私などの想像を絶するご苦労があっただろうという想いのみが募る。その間、重度の貧血症を患われたという資料の情報も併せて、自らがその



グレアム先生ご夫妻

人格に直接触れることなど、在学中の私には全く想像すらできないことだった。飽くまでも、中学部入学以来、ベーツ先生は“Mastery for Service”というモットーを残された、関西学院歴史上の偉大な院長のお一人であるという認識だった。

残念ながら、コピーを取っておかなかったため、私がどのような手紙をベーツ先生に書き送ったか、今となっては分からない。しかし、こうした経緯で、便箋 5 枚にも及ぶ 1962 年 11 月 12 日付返信が私の手元に届いたのだった。その内容は、65 周年記念誌に掲載され、100 年史に再掲された通りであるが、私個人にとっては、お手紙を手にした瞬間、ベーツ先生が「偉大な、歴史上の第 4 代院長」から、生身の、その呼吸と体温を感じ取ることのできる、僭越だが「私のベーツ先生」となったのである。その手紙が、ESS 部長職にあったからとは言え、私宛てに書かれていたので、友人の協力を得て作った自分自身のための卒業アルバムの中に大切に収蔵していた。家に保管していた 65 周年記念誌をはじめ、多くの記録ファイルを阪神大震災で失った。しかし、この卒業アルバムは手元に残った数少ないものの

一つであった。ただ、自分自身の高齢化に鑑み、かつ資料としての重要性からも、関西学院大学学院史編纂室に保管願うのが妥当と考えるようになった。2016 年 10 月 3 日、経済学部の神崎高明教授にお口添えいただき、同室を訪ねた。その折、幸せなことに再現されたベーツ先生の執務室(旧院長室)を見学させて頂くことができた。先生の大きな机の上には、きっとお仕事関連の書類が山積みされていたことだろうと想像した。お部屋に設置された奉安庫に納めるご真影を受け取るため、自ら兵庫県庁まで出向かれたというお話に、そのご心労を推察したり、先生のお写真が約 20 年の時代を表しているのだろうと想像したり、先生の遺品が置かれたお部屋の空気が吸えただけでも感慨深い一時であった。



C. J. L. ベーツ第 4 代院長



家に戻り、昔懐かしい自作のアルバムをもう一度眺めると、多くの友人の親しみを込めたメッセージが、まるで昨日のこのように書き連ねられていた。最後のページには、グレアム先生ご夫妻の写真と今は亡き奥様の次のお言葉があった。原文は英語であるが、私が勝手に日本語に直したものを掲載させて頂く。(翻訳ニュアンスの微妙な違いはご容赦を。)

仁 川

1996 年 6 月 26 日

主の祝福とご守護が貴方の上にありますように  
主のお顔の輝きとお慈しみが貴方の上に降り注ぎますように  
主のお顔が貴方を見つめ、そして主の安らぎを分け与えてくれますように  
安らぎは活気に溢れ、彩豊かで、芳香と深い質感を持ちます  
その安らぎこそは主に向かって育ちゆく人々の生命にとって  
重要な活力源となるのです

エヴェリン グレアム

1940 年 12 月、ベーツ先生が心を残して離日される折、後事を託す数人の方々に残された言葉が“Keep This Holy Fire Burning.”(この聖なる火を絶やさないように)であったと聞く。そして、関西学院には“Mastery for Service”(奉仕のための練達)という今も受け継がれるスクールモットーを残された。そのベーツ先生も 1963 年 12 月 23 日に亡くなられた。それは、私が頂戴したお手紙の日付(Nov. 12, 1962)から僅か 1 年余りのことであった。



ESS『経済学部卒業アルバム』1964 年【後列右から 3 人目が筆者】

『学院史編纂室便り』第 46 号 (2017 年 1 月 2 日)

関西学院大学 学院史編纂室 〒662-8501 西宮市上ヶ原 1-1-155

TEL: 0798-54-6022 FAX: 0798-54-6462

<http://museum.kwansei.ac.jp/archives/>